
そうさ、ここは愉快なたそがれ寮。

南風十羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そうさ、ここは愉快なたそがれ寮。

【Nコード】

N1447U

【作者名】

南風十羽

【あらすじ】

突如拉致されて連れて来られた先は、何かしら普通じゃない能力を持つ者達が住む奇妙な寮。そこに住むのは、一見フツの王道ヒロイン、生意気な妹系放電少女と風を操る悪戯盛りのシスコン少年、無自覚雪女に極度のビビりはトラップメーカー！？
他にも色々“普通じゃない”奴らの集まるこの寮……はたして俺は、この非日常から日常に戻るのだろうか？

始まりは拉致から。

学校という名の呪縛から解き放たれ、やっと解放されたというのにこの仕打ちはなんなんだ。

いつもの通学路を通って下校中、突然黒いスーツに黒いグラサンをかけたスキンヘッドの厳つい男達に捕まり、これまた無駄に胴長な黒い高級車——ああ、そうかあれがリムジンか——に無理矢理入れられ、そしてどこかもわからない場所に着き、牢屋っぽい部屋に閉じ込められている。

——そう、俺こと【渚大和】^{なぎさやまと}は、学校帰りに拉致されたのだ。

本当に訳がわからない。警官に補導されるような真似はしてないし、そもそもそんなことは生まれてから義務教育の終了した今まで一度もやったことない。

……いやそれ以前に、皮肉にもいたって平々凡々な毎日を通り越してきた俺にそんなことする勇氣なんてないんですみたいな。まあどうでもいいのだが。

とにかく、ごちゃごちゃと自分の頭の中で自己満足な語り文入れてもしょうがない。誰かに是非とも説明をお願いしたいところだ。

何故俺が、いきなりこんな目に合わされたのか——

と、そのとき、石畳みの床を規則的に叩くような音が薄暗い牢屋の中に——ああもう、まどろっこしい。

足音だ。誰かが俺の入られたこの牢屋に近づいている。そして足音の主が、何やらぶつぶつ言っているのが微かに聞こえてきた。『てことは何だ、説明も無しに拉致って来たのか馬鹿共が。それでは私がああ面倒な説明をしなければならいだろうが畜生め。お前達は私に手間を取らせるつもりなのか？ それともそんなことも考

えられない位にまで馬鹿だったというわけか？」

「も、申し訳ありません……」

女性の声だ。……それにしても、なんて威圧的な口調なんだろう。今のセリフのどこにも女性らしさなんて見当たらなかったぞ。ていうか正直コワイ。

それに対してぺこぺここと謝っているのは、どうやら俺を拉致った黒スーツの一人らしい。

畳み掛けるかのようなマシンガントークに責められて「申し訳ありません……」をただひたすら繰り返している。ちよつとカワイソウだ。

「おい無事だと思いが無事だろうな。返事をしろ」

黒スーツにちよつと同情したその時、いつの間にか鉄格子の向こう側にぼんやりと、人の姿が見えた。

……その言葉が自分に向けられたモノだとは気づかず、一瞬ぽかんとしてしまった。だがすぐに持ち直して負けじと返答する。

「ああ、おかげさまで無事……じゃねえだろ！ どこだよここ！俺を捕まえて——」

人影に掴みかかるように怒涛の勢いでガツと鉄格子に迫ったとき。

プシャー

「俺を捕まえて一体何をす——うがああああああっ！？」

何やら制汗剤のようなスプレーを、顔面から十センチ未満の距離で発射された。

「今それを説明するんだろうが馬鹿が、黙れ」

「痛ああああ！ 目がっ！ 顔がっ！ うああああ……」

しばらくコンクリート剥き出しの地面を転げまわること一分弱。

「つああ……何すんだてめえ！」

「ああ？ なんだ貴様その口の利き方は」

——コワイ。なんて凶悪な顔をする女なんだ。

つま先から頭の先まですくみあがり、思わず失禁しそうなほどの戦慄が全身を駆け巡った。コワイ。この人マジでコワイ。

ようやく彼女の姿を確認したのだが、腰まで届く長い黒髪に、仕事用のような黒いスーツでそのすらっとした体軀を包んでいる。また黒スーツか。外見は二十代後半といったところだろう。しかし怒っているのか無愛想なのかは知らないが、そのせいで少しは整っている顔が台無しだぞ。

「……わかりました。じゃあその説明とやらを聞いてやりましょうじゃないか」

「何なんだその敬意を表しているんだか表してないんだか分からない態度は」

お前が黙れと言ったんだろうが。

「ふう、まあいい。大人しく聞く気になったのならそれでいいだろう。では、まず初めに……ここは元々お前が住んでいた街からはだいぶ離れている。だから戻ろうとしても無駄だ」

「なっ、じゃあ俺はどうやって家に——」

「話を聞けと言ったはずだが？」

ギロリ、とその鋭く細い目が睨んでくる。

「……………すみません」

思わず謝罪。俺は黒スーツ同様にすっかり丸腰だった。

そして、何やら力ナリ重要なことを聞き逃した気がした。

「というわけで、お前は今日から——」

いや、聞き逃したんじゃない。

なんか聞いちゃいけないことを……頑張って聞かないようにしてる気がした。

「今日から——でしばらく——」

聞いちゃダメ聞いちゃダメ聞いちゃダメだって。

「おい、ちゃんと話聞いているだろうな？ 返事をしろ」

「はいいいイイ！ スンマセンスンマセン聞いていませんでしたスイマセン！」

結論、俺はこの女性には逆らえない。

「ったく、人がありがたく教えてやっているというのに……仕方ない、これが最後だからな。耳の穴空っぱになるまでかっぱじってよく聞け」

そう言うつと女性は溜め息をつき、再度はつきりと、今度は聞きもらさせないように俺に告げた。

「お前は今日から、この寮でしばらく暮らしてもらうことになる」

「……………はい？」

最初に出てきたのは、どうしようもない疑問符。大量のクエスチオンマークで脳内メモリは埋め尽くされ、その後、五秒後にフリーズ。頭の中は真っ白に。

「えつと、その、話がまったく見えないんですけど」

「そういえば自己紹介が遅れたな。私はこのたそがれ寮の寮長を勤めている【黒井霞^{くろいかすみ}】だ。今後、私のことは寮長と呼べ」

目から髪から服から靴まで黒一色なだけあって、名前にも黒が入っていた。でもその黒さと存在感は霞んでなんかいない。つや消しの黒でも塗っているかのように黒ずくめだ。

そんなどうでもいいことに気を取られているうちに、この上から下まで真っ黒な女性——寮長はやっと、俺の一番はじめの台詞に対する返答をした。

「理由は今はどうでもいいので後ほど説明する。それよりまずはこの寮についてだ」

……え、ナニ？　さんざん焦らしておいて理由どうでもいいの？　いやいやいや、ここまでするからにはせめてちゃんと納得のいく説明をしようよ。すぐく今更ながら俺への配慮ゼロ？　ていうかここ、牢屋とかあるくせに寮だったの？

と、いうか……なんで俺が、いきなりわけもわからぬ未開の地で暮らさなきゃならないんだよ！

「……お願いします」

非常識な発言に対するツッコミや言いたいことを全部呑み込んで、
やっとそれだけ言った。

……よくやった、よくやったぞ俺。

「よろしい。とりあえず前書きから言っておこう……覚悟はいいか？」

寮長はここで初めて、少々ためらいながら言った。

——ふつ、今更何を言い出すと言っただろうか。甘く見てもらっちゃ困るな。もう十分イレギュラーを受け入れる覚悟と冷静さは出来ているぜ。

例え、私達は実は宇宙人なんだとか言われようが俺を解剖して地球人の生態を調べてやろうという土星人か火星人の陰謀だろうが何でもこい。俺は絶対屈しないぞ！

「ここは普通じゃない者による普通じゃない者のための普通じゃない奴らの集められた普通じゃない寮……【たそがれ寮】だ」

ここは普通じゃない者による、

普通じゃない者のための、

普通じゃない奴らの集められた、

普通じゃない寮、

たそがれ寮。

数秒間の静寂。

そして俺が真っ先に思ったこと、それは……

「ただ、普通じゃなければそんなに『普通じゃない』を繰り返せるん……だ、よお……」

本当は思いつきり叫びたい気持ちでいっぱいだったが、突然のめ

まいに襲われ、気持ち悪いような吐き気のような倦怠感のような気分がぐるぐる巡った後、ふっと気を失ったのであった……。

「ふう…… やつと効いたか」

「ひよっとして、さっきのスプレーですか？」

「ああ。怯助の奴、強力なヤツを頼むと言っておいたというのに。即効性の欠片もないではないか」

「いや…… 効果は充分にあったと思うのですが……」

「とにかくこいつを運ぶぞ。どこか空いている部屋を探して運んでおけ」

「わ、分かりました。寮長はどちらへ——」

「——こいつの母親に、事情を説明しに戻る」

始まりは拉致から。（後書き）

初めましての方は初めまして。会いたかったです。

お久しぶりの方はお久しぶりです。会いたかったです。

作者の南風十羽と申します。以後よろしく願います。

さて、この作品は私が三年程前に執筆していた小説の改訂版となっております。

設定・展開などを練り直し、しっかりとした作品にしたいと考え、このように新連載という形を取らせていただきました。

また自身の受験や新生活の影響を受け、しばらくの間なろうでの活動を休止しておりました。

ですがしばらく活動しない間に、私の中の創作への想像力が枯渇していき、度々寂しい気分になったりしておりました。

今後の展開ですが、とりあえず本筋の第一章までは、なんとなくですが見通しを立てております。

以下、作品を読むにあたっての注意など。

- ・この作品は文章量の下限を定めておりません。
 - ・よって作者の気分により、文章量が短い話もあれば、逆に長い話もあったりするかもしれません。
 - ・また作画崩壊ならぬ文体崩壊などの恐れもあります。
 - ・以前に投稿した話を修正した物は、作業に時間をかけただけ丁寧になってる（と思いたい）のですが、新規作成の話や何度も修正してない話は粗が目立つかもしれません。
- 何卒ご了承ください。

では、リニョーアルオープンした【たそがれ寮。】を、どうぞお楽しみ下さい。

出会いは時に唐突、時に強引である。

目が覚めたとき、俺は自分がベッドに寝かされていることを認識するのになかなかかった。

そういえば……結局、俺の聞きたいことは何も聞けなかったな……。

あれからどれくらいの時間が経ったのか分からないが、まだ身体がだるい気がする。起き上がってあの女——寮長を探して問い詰める気力は、無いに等しい。

しかしそれにしても、このベッド、ふかふかで気持ちいいな。匂いも、なんか甘い香りがするような……やべ、何だかまた眠っちゃいそうだ……。

「あ、やっと目、覚ましたみたいだね」

パタン、と扉を閉める音をたて、入ってきたのは俺と同年代くらいの女の子。

——か、可愛い。

華奢だが女の子らしい丸みをおびた身体のライン。ふっくらとした桃の頬に、くりくりとした瞳にはルビー色の輝きが宿っている。

長い薄茶色の髪を耳の下でゆるく結んでいて、服装は……ピンク色のセーラー服かな？ 一見変わった制服らしき格好をしていた。胸の上の真っ赤なリボンが、ピンク色の服と合わさって彼女の女の子らしさをアピールしている。

「ふう、寮長さんがキミを抱えてきたときはびっくりしたな。でも無事みたいでよかったよ」

そして何よりも印象に残るのは、あえて点数を付けるならば文句なしに百点満点をつけたくなるようなその笑顔。ぱあっと辺りを照

らす太陽のように明るく、それでいて柔らかい日差しの暖かさも兼ね備えたその微笑は、無邪気とも穏やかとも表現できない程に輝かしい。

「どうしたの？ まだぼーっとしているみたい——」

不思議そうに俺の顔を伺う彼女の視線は、俺から俺の寝ているベッドへ。一瞬「あ」と呟き、頬にほんの少し朱がさす。

「……え、えつと、ごめんね。今お忙しいから、空いているのがアリスの部屋しかなかったの。寝心地悪かったかな、アリスのベッド……」

声も可愛い……さっきの長身黒女とは大違いだ。ちょっと舌つたらずな少女の声は、何だか安心感を与えてくれる気がする。さっきの魔女とは違って。

つて、あれ？ 今彼女はなんて言っ……。

——寝心地悪かったかな、アリスのベッド……。

「え……あ、わあっ！ ごっごごごめん！ このベッド君のだったのか！」

今さら気づいたか馬鹿！ と自分で自分にツツコミを入れてみる。どつりでいい匂いがするわけだ。周りをよく見渡せば、そこはシンプルながらも清潔感を感じさせる部屋。ところどころに置いてある可愛らしい小物がいかにも女の子らしい。

つまり——ここは彼女の部屋なのか。えっ、俺ったら初対面でナニやらかしちゃってんの？ いやいや気絶してたんだけどさ。

「ご、ごめん……勝手にベッドで寝ちゃって」

「いつ、いいいいいよ！ 気を失っちゃってたんだから仕方ないよ。アリスは気にしてないよッ」

さっきよりも一層顔を赤らめぶんぶん手を振りながら、それでも笑顔で答えてくれた少女。

女の子の部屋に入って、しかもベッドで寝るなんて、気絶したとはいえ、結構すごい体験しちゃったかな。

……うむ、普通じゃ考えられないよな、うんうん。

「寮長さんからお話は聞いたよ、大和くんだよな？　新しくここに
住むんだよねッ」

「……どうしても住むってことは確定してるのか。はあ……」
先程リアルに体験しておきながらなんだが、どうやらあれは夢オ
チではなかったらしい。

……不満の声を出そうにも、もうため息しか出てこなかった。う
ん。あまり思い出したくもない。

「まあ無理もないかな。今回は寮長さんも、なんだかちょっと強引
だったし。大和くんが驚くのも無理ないと思うよ」

くすくすと、小鳥がさえずるように笑う少女。

今回は、ってことはもつと別パターンがあつたのかよ。もうちょ
つと親切な。

「そっか。部屋があるってことは君も……」

「うん、この寮生だよ。自己紹介がまだだったかな」

そこで彼女はいったん区切ると、くるっとその場でターンし、ち
よこんとスカートの裾を摘んで微笑んだ。

「わたしは【アリス】。本日は大和くん、寮をご案内する役目を
寮長さんから預かっております。これからよろしくお願いします、
だよッ」

極上のスマイル付きで挨拶され、俺はすっかり彼女に魅了されて
いた。

やっぱり、可愛いなあ。この娘がいるなら、この何だかよく分か
らない寮生活も、悪くないかもなあ……。

「……あの、急に黙りこくっちゃったけど、平気かな。まだ寝てた
方がいいかなあ……？」

「うっん元気元気ほら元気！　すっかりさっぱり！」

小首を傾げて本気で心配そうな顔をするアリスに、精一杯空回り
気味の元気をアピール。

「じゃあ、早速だけど散歩がてら寮を案内するね。もう歩けるかな？」

「あ、ああ、だいじょダイジヨブ！ 是非ともお願いするよアリスちゃん！」

アリスでいいのに、と微笑みながら呟いた少女に導かれて、俺は部屋のドアノブに手をかけ、ゆっくりと扉を開いた。

「——ようこそ、たそがれ寮へ。私達は貴方を心から歓迎致します……」

数分後、俺は早速この寮へ来たことを後悔した。

階段から落ちるときは細心の注意を払いましょう。

「寮を案内するって言っても、まずは寮の人達にご挨拶しなきゃね」
「挨拶周りはご近所付き合いの第一歩、ってか？」

「そういうことッ」

とりあえず部屋を出た俺達は、一階上の三階へと向かうため、中央にある階段を上っていた。

ちなみに先程まで俺が寝ていたのは二階にあるアリスの部屋で、彼女の話によると同じ階の空き部屋が俺の部屋になるそう。

「同じ階で嬉しいな。今度遊びに行ってもいいかな？」

あの弾けるような笑顔の前では、俺に断る権利も勇気も度胸もない。

……せいぜい、服やら物を散らかしたり、なんか後ろめたいモノや変なモノを置きっぱなしにしたりしないよう気をつけなければ。

あ、そう。

「ところでさ、この寮には、一体どういう奴らが住んでいるんだ？
なんかやたら仰々しい、いろいろ不足している説明は寮長から受けたんだが」

「あはは、それはね……見たほうが早いよ」

そして三階に上がった途端、

「先手必勝！」

「のわっ！ あだだだだだだだッ！？」

俺は何者かに勢いよく突き飛ばされ、奇声を発しながら頭から階段を滑り落ちていった。

ゴスゴスと段差に身体を打ちつけ、階下まで落ちきったところで静止する。

「いつつ、痛つてえ……いきなり何しやがる！」

俺は相手に向かって思いつき怒鳴った。頭の打ちどころが悪か

つたら危つく昇天していたかもしれない。幸いそれはなかったが、階段の角にさんざん当たったので力ナリ痛い。

だが突き落とした張本人は謝る素振りもなく、階段の上から見下ろす形で仁王立ちしながら、偉そうにこう言うのであった。

「それは耐えられなかった貴様が悪いのだ！ お前みたいなひ弱なヤツはこの雷華様がその腐れきった根性から叩き直してやる！ さあ土下座でもして褒めよ讃えよ感謝しろ！ 感謝感激雨アラレの嵐だっ！」

句読点もなしに長ったらしい台詞を吐いたのは、俺より遙かに年下の…… 小学校四年生ぐらいの女の子だった。

まるでそれ自体が光を放てるように輝く金色の髪をツインテールにし、太陽高く昇る曇りなき青空のような瞳は、強い眼光を俺に向けて一直線に放っている。下は動きやすそうな短パンと、上は緑のタンクトップの下に黄色のキャミソールを重ね着。服装からして活動的な少女なのだろう。しかめっ面、感嘆符のやけに多そうな言動…… とくれば、なんか容易に性格が読めるのだが気のせいだろうか。

しかし出会い頭でいきなり階段から落とされるとは…… 洒落にならない。これは一種の宣戦布告と受け取っていいのか？

だとしたら、俺のやるべきことは一つ。

「なんだなんだ？ 早速雷華様に畏縮されたのか。つくづく弱っこいヤツだな……」

態度だけのご立派な少女の挑発に乗せられることなく、俺は至って冷静を装いながら階段をすたすたと駆け上がり、少女の前に立ち彼女のおでこに手をかざし停止させ、

ピシッ

思いつきり力を込めてデコピンしてやった。

「ッ！ う、ううう……ッ、い、いきなり何するんだ無礼なヤツめ

っ！」

「それはこっちの台詞っつーの！ 初対面で突然こんな目に合わされちゃコレくらい、いやホントだったらこんなデコピン程度じゃ気が済まないのを、チビっ子だからってわざわざ手加減してやってんだ。感謝するのはお前の方じゃねえのか？」

「何をう！ この雷華様に向かって、なんて生意気な……！」

「だからそれを言うならこっちの台詞だつての！」

俺がそう言い返すと、この生意気な少女はほんの少したじろいだ
が、すぐ反論してきた。

それにしても、あれだけ偉そうに振る舞っていたわりに、デコピン一つで涙目とは……こうなるとさすがに年相応だな。

「貴様、雷華様に真っ向から刃向かうというか。ならば、それなりの報復は覚悟して貰わねばな……」

「……少しは年相応の喋り方した方がいいんじゃないの？ どこで覚えてきたのか知らんが、ガキが背伸びしたってちつともかっこよくなんてないぞ？ 正しく使えてるかどうかが微妙だし」

「むっかあああ！ もういい、殺ル！」

少女が手を振り上げた瞬間、バチンッ！ という音と共に目の前の床が黒く焦げた。

「なッ！ あ、危な……なんだ今の」

「今のはわざと当てないでおいだが、次は当てるぞ」

見ると、少女の周りになにやら青白い光が、無数に走っているのが分かった。二つ結びの髪の毛は逆立っていて、バチバチと不穏な音が鳴っている。

おそらく——電流か何かだと思う。

いやいや、そんな。まるで漫画やアニメみたいな……って、じゃあ実際目の前にいるコイツは何なんだ。明らかに普通じゃない様子のコイツは。

つまり、ひょっとして、ここにいるヤツってみんな——

だがここで不意にアリスが大声を出し、俺の思考は遮られた。

「大和くんも雷華ちゃんもそこまでッ！ でないと、アリス怒るよ？」

「ひっ！」

今の悲鳴は俺ではない。雷華……でいいんだよな、そいつが短くしゃっくりのような悲鳴を上げ、恐る恐るアリスの機嫌を伺っているようだった。

そんなに怒ると恐いのか……？ 彼女の表情が（俺の見る限り）常に笑顔なので想像もつかないが。

改めてアリスから紹介される。

「この娘は【あらがきらい荒垣雷華】ちゃん。ちょっと元気すぎるのが困るけど、活発で可愛い女の子だよ。仲良くしてあげてね？」

「ふん、せいぜい三日でくたばらないよう努めることだな」

「腹立つわ……すっげえ腹立つわあ……」

たぶん仲良くなれそうにもない。俺は即座に結論を出したのだった。

「さて、雷華ちゃんともご挨拶終わつたし、次は風太くんかなッ」
パンツと両手を合わせて、仕切りなおすアリス。

「それなんだけどアリス姉ちゃん。風太なら今朝からずっといないぞ」

「えッ？ 風太くんいないの？」

「うん。たぶん夕飯までには帰ってくるだろうが……」

二人が会話してる間、俺はポカーンとしていた。

何の話——そうだ、今はアリスにこの寮の住人紹介してもらってるんだっけか。さっきのドタバタで忘れかけてた。

「えっと、口挟んで済まないが、風太って誰？」

「あつ、ごめんね。えっと、風太くんは雷華ちゃんのお兄さん。いつもは雷華ちゃんと一緒にいるんだけど、今はどっかに行っちゃっていないみたいなの」

「ふーん。コイツの兄貴か……」

ろくな育ち方してなさそうだな。雷華^{「レハ」}見る限り。

「震子姉ちゃんも数日前から見かけてないぞ。ってことは、残りは

……」

「……怯助さん、だね」

ゴクリ、とつばを飲む音が聞こえそうな表情で、二人がうなづいている。

「こ、今度は誰だよ」

「【暗田^{くらたきょうすけ}怯助】さん。アリスたち寮生の中では一番年上なんだけど……」

「極度のビビりで、ひきこもりだ。シャレにならないレベルの」
シャレにならないレベルのひきこもりって。よっぽど暗い人なのか？

「でも、ただのひきこもりだろ？」

なんでそんな戦々恐々する必要があるんだ？

三階の廊下を少し行くと、アリスはとある部屋の前で立ち止まった。

「この部屋が怯助さんのお部屋だよ」

そう言いながらアリスがドアを開け、部屋に上がり込む。同様に雷華も無断で室内に入っていく。

「ちょ、ちよっと、勝手に入り込んでいいのか？ 仮にも人の部屋なんだからプライバシー^{プライバシー}ってものの、が……」

……部屋？ 暗すぎてまったくよく分からない。単に何も見えな
いからか本当に何も無いのか分からないが、空間がとても広く感じる気がする。

とりあえず入り口付近の壁を触り、照明のスイッチを探す。スイ

ツチは予想通りの場所にあり、それをパチンと付けた。

「……あれ、全然明るくならないな」

パチパチと何度も付け直してみるが、一向に部屋は明るくならない。これは照明のスイッチじゃないのか？

じゃあこれは何のスイッチ……？

「大和くん後ろッ！」

「え……っうおおあッ!？」

俺が後ろを振り向いた刹那、真っ先に眼前に飛び込んできたのは——網？

いや、網じゃない！こ、これは——ハエ叩き！？
間一髪でハエ叩きをかわし、着地しようとして——

足元の地面がなくなっていた。

「——うつ、うわあああああああああ！」

そのままわけもわからず真っ逆さまへと、俺は落ちていったのだ。
った。

「ら、雷華ちゃん……落とし穴のスイッチ、押したね？」

「ふん。これが報復だ。思い知ったか馬鹿者が！アハハハハ！」

「大和くん、ここにいないから聞こえてないよ」

「……………」

「だからたぶん、わけもわからず運悪く落ちた、としか——」

「……アリス姉ちゃん。それは言わない約束っていう暗黙のルールが……」

「とにかく、アリスたちも降りようか。一人であの迷路を通るのは、絶対に危ないよ」

「ひ、一人でも二人でも危険なものは危険——」

「あれ、おかしいな。さっきどこにあるかも分からない落とし穴のスイッチを迷わず押したのは、どこの誰かな？」

「ご、ご案内させていただきます……」

仄暗い、地下の迷宮から。

……どこだココ。

気が付いたら俺は巨大なクッションの上に大の字になって寝ていた。

確か地面がなくて、それで落ちて——落ちた先もさっきの場所と変わらず暗かった。強いて言えば空気がひんやりとしていて、やや埃っぽい臭いがするぐらいか。あのときの牢屋と同じだ。

「……誰も来そうにないし、じっとしててもしょうがないよな……」
そう言いながらやっと体を起こすと、何か冷たい物に指が触れた。
「——ッ!？」

突然のリアルな感触にびっくりして即座に手を引っ込める。

よく見てみるとそれは白くてやや細身の腕だった。体温はまったく感じない、というかむしろ冷たすぎるくらいで——し、死体!？
近寄ってその全貌を確認する。そこには女の人が横たわっていた。肌も髪の毛も真っ白と書いていいほど色素が薄く、髪型は少し長めのボブカット。顔立ちもとても整っており、儚げなイメージの美人に大人の禁欲的な色気も混ざった感じ。

服装は……ッ!？

胸元の大きく空いたチュニックセーター、そこから豊満な谷間を眺めることができ、袖や腰の辺りからはきめ細かな素肌をした四肢が伸びている。

意外とグラマーな体つきをした女性だなあ。ってソウジャナクテ!

なんでこの人『セーターしか着てない』んだ!？

いや確認したわけじゃない! 決して俺がそのようなコトをしたわけじゃないぞ!

だ、だって胸の辺りとかすごいギリギリだし、てかここまでオー

ブンにしてたら中に着てるモノとか絶対見えるはずなんだし、それがないんだし、あと脚も太ももの付け根辺りまで見えてるし……ッ！

とそのとき、今までぴくりとも動かなかった女の人の身体がもぞ……と動き出した。

——し、死体が動いた！

まだ重たそうな瞼をゆっくり持ち上げた女の人は、虚ろな目で周囲を見渡し、最終的にその瞳は俺を見て静止した。

「……………」

「……………」

き、気まずい……。どうしよう、こういう場合はまずコミュニケーションを取らなきゃまずいかな……。仮にも元は人間だ。頑張れば意思の疎通ぐらいはできるはず……！

なんて冗談交じりにどう対応していいか考えていると、無表情なその女性はどこからともなく——本当にどこから取り出したんだろう——小さなメモ帳とシャープペンシルを取り出して文字を書き出した。それを俺に見せる。

『しんいりさん？』

「え、あ、はい。たぶん……」

思わず返事を返す。すると女性はまた力リカリと、少し長めに文章を書く。終始無表情で。

『そう、あなたもひっかかってしまったの。こまったわ怯助くんには』

メモを見せ、片手でやれやれといったポーズを取る女性。無表情で。

しかし分からないことが多すぎたので、今度は俺から彼女に質問させてもらった。

「あの、あなたは何故ここに寝ていたんですか？」

すると女性は腕を組み、考えているようなポーズを取った後、また文章を書き始める。

『ごはんできたみたいだからむかえにいつて』

『おとしあなのスイッチをおしてしまい』

『きづいたら、ずいぶんながいあいだ、ねてしまっていたみたい』

三枚連続で書いたところで女性は筆を止めて、さらに『ほかにききたいこと、ある？』という一文を付け加えた。

そこでとつさに『なんでセーターしか着てないんですか』と思い浮かんだ自分を恥じ、ふるふると頭を振って煩惱を飛ばした。

『じゃ、じゃあえつと……なんで筆談なんですか？』

ほんの一瞬、女性の動きが止まった。思ったら、彼女はすぐカリカリと文字を並べていた。

『しゃべれないの』

……ワケ有りだろうなと思い、さすがに理由は、聞かないでおいた。

その後もいろいろと質問をして分かったことは、彼女こそアリスたちが言っていた震子ひむろしんこさんこと【氷室震子】さんであるということ。ここは怯助さんが隠れ住む地下室で、地下室全体が巨大な迷路と化しているということ。

地上に戻る出口は一応あるらしいが、それも震子さんにはどこにあるか分からないらしく、最終的に怯助さんを探さなければ現時点でここから出ることは出来ないのだそうだ。

「じゃあこつから出るために、早いとこ怯助さんを探しましょう」
こくん、と震子さんは頷くと、差し出した俺の手を掴んで立ち上がった。

すぐ傍に（親切にも）都合よく置かれたアウトドア用のランプを手にも、辺りを見渡す。このクッションの間は意外にも広いが、一本だけ道がある以外、四方は壁に囲まれていた。

「ここに行くしかないみたいっすね」

いざ行かんと歩き出したとき、くいつと袖を引っ張られた。

「どうしたんすか？」

震子さんが突きつけたメモには『きけん。ようちゆうい』と書かれていた。

「わ、分かりました。気を付けます」

無表情でこくこく頷く震子さんがちよつと可愛かった、と思ったのは内緒。

ぐねぐね曲がる一本道をしばらく歩くと、初めての分岐路にたどり着いた。

「右か左か……震子さん、どっち行きます？」

そう言いながら震子さんの方を向くと、彼女は耳に手を当てて、耳を澄ませているようだった。

『なにか、おと、きこえる』

その時、突然風が吹き、俺たちの髪をぶわつと撫でた。

「地下なのに、風……？」

瞬間、暴風と共に真正面の壁を突き破って現れたのは、高さ二メートル強の巨大な双頭の――

「い、犬ウ！？」

とつさに俺は右へ全力疾走。震子さんの手を引っ張りながら走る走る走る！

背後にハッハッという犬の呼吸音。生ぬるい風を感じながらも俺は脚を止めずに走る走る。が、しかし――

「――震子さん！」

震子さんが床に倒れる。荒い呼吸音が彼女の限界を伝えていた。だが双頭の巨大犬は容赦なく迫り来る。

まずい、もう追いつかれる――！

突如吹き付けるかのような風が、俺たちの間を裂いた。

――まるでファンタジー世界にありがちな、何者かがそこに現れ

てくるような風が。

子供は風の子、悪戯っ子。

突如吹き付けるかのような風が、俺たちの間を裂いた。

——まるでファンタジー世界にありがちな、何者かがそこに現れてくるような風が。

突風と共に登場してきたのは、深い密林をイメージさせる深緑の瞳と、草原のようになびく髪を持つ少年。

彼は懷から銀のナイフを取り出し、それを巨大犬の左足へと投げつける。犬は ギャンツ！ と悲鳴を上げ、痛みに悶えその場へうずくまった。すかさず少年が太めのロープで犬をぐるぐると縛り付けると、巨大犬は身動きが取れなくなり、ギャンギャン吠え初めた。

——ほんの一瞬の出来事だった。

「ぜえっ、ぜえっ……す、すげえ……」

本来なら息を呑むところだが、呼吸が乱れてそれどころじゃない。転倒して巨大犬に轢かれる寸前だったが、震子さんもどうやら無事のようにだ。

「間一髪だなア、震子姉ちゃん。そっちのお前も大丈夫かー？」

うつ伏せのまま顔を上げ、こくこくと首肯して無事の意を伝える震子さん。

緑の少年はこちらを振り返り、膝を折り荒い呼吸音を響かせる俺を見てこう言った。

「とりあえず、この迷路の中じゃ身の安全を保障しきれねエ。安心して息つける場所まで移動するか」

「はっ、はっ、はあっ……そ、その方が非常に助かる」

「んじゃオレが震子姉ちゃん担ぐから、悪いがお前は自力で歩いてくれねーか。さすがにオレの体格じゃ、キツイ」

服装は雷華同様短パンに、黒のタンクトップの上からセーターを

被っているのだが、単に彼には大きすぎるのかわざとなのか大幅に肩を露出していた。

確かに、どう見てもこの少年は——小学校高学年ぐらいの、標準体型の男子にしか見えなかった。

「んじゃ、まー歩きながら軽く自己紹介。オレは【荒垣風太】」
あらがきふうた

「あ、ああ、俺は渚大和だ。よろしく」

思えばこの寮に来てからというものの、まともに自己紹介できたのは彼が初めてではないだろうか。自分で自分の自己紹介をするのが、何故だかすごく久しぶりな気がする。今までの挨拶回りではアリスや雷華に震子さんと怒涛の女性尽くし、しかも何かしらハプニング付きの対面だったせいで、こちらとしては調子が狂いっぱなしだったのだ。

アリスの時は彼女のベッドの上での挨拶だったし、雷華の時はいきなり階段から突き落とされギャーギャー喚かれるし、震子さんの時は最初死体かと思ったし見えちゃいけない部分がちらつと見えてたし……特に荒垣雷華、あの悪餓鬼は一回徹底的に締め上げないと気が済まな……ん、荒垣？

「お、お前が雷華の兄の風太か！」

なんということでしょう。先刻（妹がこんなならその兄も）ろくな育ち方してなさそうだな、とか思った自分が恥ずかしい。兄の方は人が出来てるじゃねーか。是非とも風太の爪の垢を煎じて飲ませるべきだ、妹に。

「あん？ 確かにそうだけど、アイツと何かあったのか？」

「何かあったなんてもんじゃねーよ！ 出会い頭に階段から突き落とされるわ、電気だかなんだかよく分からないモノで攻撃されかけるわ、散々な目にあったわ！」

「まーまー落ち着けて。そりゃ災難だったな、ワリィ」

「ああ、いやまあ、お前が謝ることじゃないよな。こっちこそ突然すまん」

そつだ、いくら兄妹だからってお門違いもいいとこだよな。申し訳ない限りだ。

「……その状況からクリティカルを免れたか。まあまあ悪運は強いみたいだなア」

ただ何故か今、妙な含みがあつた気がしたのは俺の気のせいだろうか。

「大和だっけ？ まあこれからよろしくな。色々あるけど、ここも慣れれば楽しいから。オレも協力するから早く馴染めよ、な？」

もうすっかり住むこと前提で話が進んでしまっている。まあ、今やってることも挨拶回り（という名のハラハラドキドキ動物園ツアー）であるわけで。でもおかしいな。俺自身ここに住むことに抵抗する気もなけりや、抵抗して帰ることを許可されたとしても、何故か無事自宅に帰れる気もしないんだが。あの年増女にスプレー顔射され、あの悪餓鬼に突き落とされて頭おかしくなったか？

ふと、風太の背におぶられた震子さんと目が合う。何も言わない代わりに親指を立てるジェスチャー。俺も同様にサムズアップで返すと、無表情のはずが心なしに満足げな顔。その茶目っ気ある仕種は、俺の顔を綻ばせた。

風太の先導の下、ようやく怯助さんの作業部屋が見えてきたところだった。

と、そこに後ろから聞き覚えのある声が。

「あ、風太見つけ！」

「大和くん！ 震子さんも！」

どうやら雷華とアリスも落ちてきたらしいな。ただ二人ともさほど疲れた様子ではないようだ。俺達の通ったルートがたまたま悪か

ったのだろうか。

「おー来たか我が妹よ。会いたかったぜエ」

「昼飯も食わないでどこ行つてたのだ。雷華様に断りを入れてから外出するよう、いつも言つてるではないか！ 朝からずつとここで迷子になつてたのか？」

「まっさかア。午前中はちつと別件で動いてたんだ。出かけること言わなかったのは悪かったよ」

そう言いながら風太は、なだめるように雷華の頭をぽんぽん叩いた。

そして何やらぼそぼそと兄妹同士で話をしているようだ。

「どうだった、新入りへの洗礼は」

「あの状況——プランEからクリティカルを免れた。どうやら悪運はそこそこ強いようだ。それに……ふん、あの落とし穴のルートで無事ここまで来るとはな。全部風にいが助太刀したのか？」

「お前もそう思うか。あと、オレが助けたのはきょーちゃんの部屋出て『少し歩いたところ』だ。お前も道中見たはずだろ、今頃おねんねしてるおっきなワンちゃん。さすがにあいつの相手をするのは素人には厳しいぜエ」

「あのケルベロスもどきか。前足に銀ナイフが刺さっていたが、寝ていたのはナイフに塗ってあった薬が効いたからか」

「そうそう。ちなみにあれは、三つ首じゃなく双頭だから強いて言えばオルトロスもどきだ。オレが合流して、助太刀したのはそれぐらいだぜエ。今回はお前も認める期待の新人つてことだなア」

「ふん！ まだまだ青いわ」

「……だが、先程の無礼はなかったことにしてやろう」

何故かその一言だけ、俺の方を向いて不機嫌そうに呟くのが聞こえた。

「まあ、この憂さ晴らしに罠オタク——ヘタレのトラップを盗んで、

そしてヘタレを問答無用で爆破してやる！」

とか物騒なことを叫びながら少女が廊下を走ったとき。

「あ、雷華気をつけるそこは——」

「ふえ？」

よく見れば、少女の足下に違和感。気付いたときには遅かった。

カチッ

雷華の周囲が爆発した。

発生源、足下の地雷型爆弾。

「簡単に、まとめるなあ……！ あんのスーパーミラクルストレートフラッシュハイパーロングヘタレめえ……！」

直撃を受けた雷華は小規模だったからこそ無事だったが、髪はボサボサ、服はボロボロ。ついでに瞳はギラギラしていた。

……いや待て待て待て。小規模とはいえ直撃。そしたら本来無事のはずがな——

「爆発する瞬間、自分の身体に電磁バリアを張ってやがった。アイツ、いつも無意識で高度な技をやつてのけるなア。兄として最初は妹が危険な目に合つてないか毎日心配して寝れなかったが……さすが我が妹、末恐ろしいヤツ」

俺にはさっぱりよくわからんが、とりあえず何やらすごい技を使つて外傷を少なめにしたらしい。そして兄は妹の成長を噛み締めている真つ最中のようなのだ。

……なんか、幸せそうだから、そつとしておこう。

たとえその手に怪しげなスイッチが握られていたとしても。

さらに距離が近かつたため、軽い爆風と床に積もっていたホコリによる二次災害で、俺の方までボサボサのホコリまみれだったとしても。

「もう頭に来た！ 爆破するだけでは気が済まぬ！ お命頂戴だ怯

助エエエエエエ！」

——と思いきや、またしても何かに引っかかったらしい。
「うにゃあ！」

謎の悲鳴と共に前のめりで転倒。びたーんという音を鳴らして床に身体を打ち付けた。

「ひひひ。引っ掛かったな妹よ！ 今のはきょーちゃんじゃなくオレが仕掛けた二重トラップだ！ ……あ、今日は白」

破裂音に近い轟音。コンマ数秒で少年は黒こげに。

「ぐ……油断してたら電撃が……」

「いや、今のは明らかにお前が悪い」

スカートが捲れたならまだしも、少女の短パンの隙間から下着を覗き見るとは。

——やっぱり、なんだかんだ言っても結局似たもの兄妹か。

この兄妹は一筋縄じゃいかない。平穏な生活を愛する俺にとって要注意人物だ。肝に銘じておこう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1447u/>

そうさ、ここは愉快的たそがれ寮。

2011年6月19日01時40分発行